

今、RC専門店の扉を叩く

緻密な造りがスピードを生み、操縦者の要求に繊細に応える…

京商のRCマシン「FW-06」に魅了された我々は、ついにaheadのチーム車輛を手に入れることにした。訪れたRCショップは、まさにモータースポーツショップそのままの迫力で我々を包み込んだ。

文・世良耕太 写真・長谷川 徹 構成・桜間 潤 撮影協力・RCアドバイザー・チャンプ 東京 秋葉原



1.手に感じる重量感…浮き立つ気持ちは抑えられない。
2.ショップ店員は、貴重な情報源。アドバイスは重要なヒントとなるに違いない。3.さまざまなチューンナップパーツが用意されているRCショップ。いずれはこれらを愛機に付けたい…。4.さっそく購入したFW-06を箱から取り出す。その精巧な造りに心が踊る。

トビラを開ける時がやってきた。その瞬間が近づくにつれ、魅力的に見えるがゆえに開けてはいけないのではないかといった迷いや、足を踏み入れた途端、排他的な視線にさらされるのではないかといった怯えが沸き上がったと同時にどこかで味わった感覚だな、という思いにも包まれた。

それは、子供の頃に味わった思いと同じだった。見知らぬ町の「ショップ」を訪れる行為は、大人になるための通過儀礼。迷いや怯えは、その後に待ち構えているドキドキやワクワクに対する期待の裏返しである。同じ体験に向かって自分は今、足を踏み入れようとしている。

ラジオコン専門店はまだで「大人の駄菓子屋」だ。通路の両側にはスプリングにマフラー、ベルギヤにフレキディスクと、床から天井まで小さなパーツが高密度に陳列しており、客に熱視線を投げかけている。一見、乱雑に配置されているようだが、レーシングチームのファクトリーと一緒に、対応車種別、機能別に整頓されている。

本体に比べればはるかに少額なチューニングパーツをひとつ手に取り、「今晩はコレやってみるか」と決意を胸にレジに向かうのはまた先の話。楽しげな未来を横目で見つつ、レディセットの「FW-06」に向かう。チューニングの楽しみの前に、手に入ることの喜びを味わうのだ。

専用サーキットを縦横無尽に走る姿

を見ると、屋内で眺めるのでは、印象がずいぶん違うことに気づいた。人工照明を浴びる「FW-06」もなかなかいい。展示スペースに置かれたレーシングカーと同質の艶っぽさを漂わせている。走らせるときだけ取り出すのではもったいないと、箱の中の「FW-06」は訴えかけているようだった。

ズシリとした重量感を感じつつレジへ。カウンターの向こうの店員は「ラジオコンの世界へようこそ」とでも言いながら笑顔で浮かべつつ「自分が乗っているわけではないのに、このカーブきついなって分かるのがラジオコン。ゲームとは『深さ』が違いますよ」と、歓迎の言葉を贈ってくれた。

必要なアイテムがそろったレディセットではあるけれども、エンジン始動の手順は反復して体に染み込ませるしかない。携帯電話なら購入後すぐに電源を入れるところだが、エンジンモデルの場合は、取扱説明書を読み込んだほうがいい。初めてのエンジン始動体験は、エンジンモデルならではのクライマックス。じらせて損はない。

とくに、スターターを引く張るタイミング、ニードルの調整などは慣れが必要。真つ先にタメになるのがフラグだ。初心者には予備のフラグを持っていた方がいい、という店員のアドバイスを聞き入れ、燃料と電池に加え、フラグを買い込んで店を後にした。

エンジン始動のイメージトレーニングは、もう始まっている。



アロンソの趣味はRCだった!

スケールサイズモデルながら最高時速は数十km/h。そのスピードを実車に換算すると、実に数百km/hにもなるというRCマシンは、F1ドライバーにもファンが多い。写真のサインは、2005年と2006年のワールドチャンピオンに輝いた、スペイン出身のフェルナンド・アロンソ選手(ルノー)。彼もまたRC、特に京商のファンで、来日するたびにRCを買い込むのだそうである。RCカーのスポーツマインドは、随一のスピードでサーキットを駆け巡るF1ドライバーたちにも支持されているのである。



京商RCについての問い合わせは
TEL.046-229-4115(受付時間10:00
~18:00土日は除く)かwww.
kyosho.comまで。なお、京商RC
カー取り扱いショップの情報は、左の
QRコードを携帯電話で読み取ること
でご覧いただけます。